

介護実習指導のあり方を探る～第2報

—実習施設指導者からのアンケート結果を踏まえて—

A Study of Carework Practice Teaching: with the Results of a Teaching staff Questionnaire

弓 貞子
Teiko Yumi

要約

昨年実施した実習施設指導者に対するアンケートを元に、障害者施設分野と高齢者施設分野の別に、「実習の進め方や指導」と「実習記録」の2項目について、指導者の指導の現状を把握した。結果から、①高齢分野の方が技術学習の入れ方に、学生のレベルや技術の難易度を配慮している ②高齢分野の方が学生との朝の打ち合わせの必要性に対する意識が低かった ③障害分野の方が、実習のフローを決めないやり方、指導担当者を全員で行っているやり方、業務経験に重きを置いているやり方が多かった ④介護過程の学習については僅かに高齢分野の方に配慮があった ⑤記録時間は障害分野で7割与えられていなかったなど特徴が掴めた。この結果から学生の実習効果を上げるための改善点や、介護過程が学習できる環境条件の考慮など、指導者の理解を図りながら実習指導体制について検討を加えることの必要性が明らかとなった。

キーワード：介護実習、実習指導、実習記録、介護過程

目次

- I はじめに
- II 実施したアンケートについて
- III 結果と考察
 - 1 実習の進め方や指導方法について
 - 2 介護過程学習と指導体制
 - 3 実習記録について
- IV おわりに

I はじめに

当短大紀要前号（第20号）に、介護福祉実習の受け入れ施設指導者にアンケートを実施した結果とその考察を「介護実習指導のあり方を探る」に発表した。これにより、1年次、2年次の実習進度に合わせた指導者の指導の考え方や実態がある程度把握でき、同時に結果を踏まえた実習方法の工夫点や学内での実習準備等についての示唆が得られた。

（詳しい内容は前号を参照）

今回は、これに続く第2報であり、高齢者と障害者施設という分野別に見ての、各々の実習指導者の指導の仕方や考え方について、特に「実習の進め方や指導」と、「実習記録」の2項目のデータを使用した。それぞれの項目について現状把握を行い、同時に業務の流れに沿った学習と個別介護計画の時間の取り方などについても、実習指導のあり方や調整、学内指導などの工夫点を模索したいと思った。

II 実施したアンケートについて

アンケート時期は、平成15年7月で、1年次学生の介護実習ⅠA（1段階）と、2年次学生の介護実習Ⅱ（2段階）の終了直後に行った。調査項目は、1学生に関する個人紹介表や実習課題など事前情報について 2実習前学習と準備について 3実習の進め方や指導方法について 4実習記録についての4大項目および小項目で編成した。調査対象は実習施設指導者で、1施設3名分を配布した。実習施設は、障害者分野は療護施設が最も多く、救護施設と重症心身障害者（児）施設である。また、高齢者分野は介護老人福祉施設が主で、老人保健施設との2種類である。

回収率は102部で81%、内訳は障害者施設47、高齢者施設55だった。回答者は、1年次生の受け入れ指導者（以後1年）、2年次生の受け入れ指導者（以後2年）と、Ⅰ・2年次生両方の受け入れについての回答があるため、実際の回答総母数は表1の通り166

となった。この内、障害者施設回答合計数は73で1年40、2年33、高齢者施設回答合計数は93で、1年44、2年49に分けられる。

表1

	障害者	高齢者	計
総数	73	93	166
1年	40	44	84
2年	33	49	82

Ⅲ 結果と考察

結果は、回答数をそれぞれ母数に対する%値で表したが、無記入による欠損値や両解答肢への解答の重なり、小数点以下四捨五入による等、100%に過不足が生じた箇所が随所に発生した。統計的処理方法としてのまずさがあるかと思うが、今回は、解答者の意思をデータに反映させることを主眼を置き、実回答数が意味あるものと判断したからである。結果は見やすい図で示したが資料欄で、詳しい数値を表にして載せている。前号紀要の図番号12が、当論文では図1になっており、以後番号順にほぼ整合している。

1 実習の進め方や指導方法について

図1は障害分野、図2は高齢分野での、介護技術の指導時期についての指導者の考え方に対する結果である。(資料 表2と3) この場合、指導時期とは、a「実習初日(1～2日)から経験させている」b「ある程度進行してから経験させている」かを問題にしている。母数、障害分野73、高齢分野93に対する回答数を%で表している。

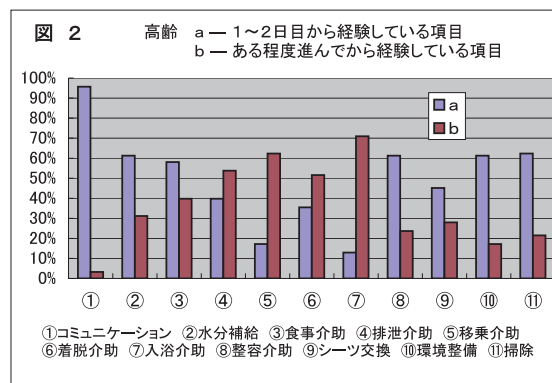
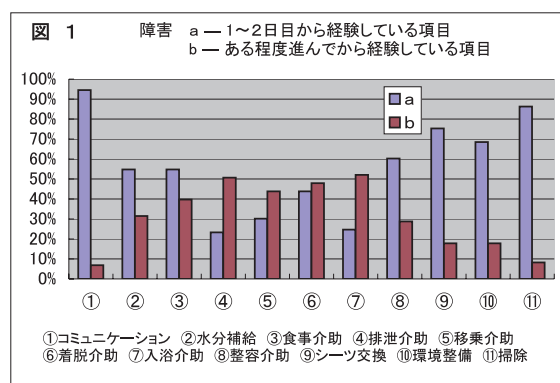
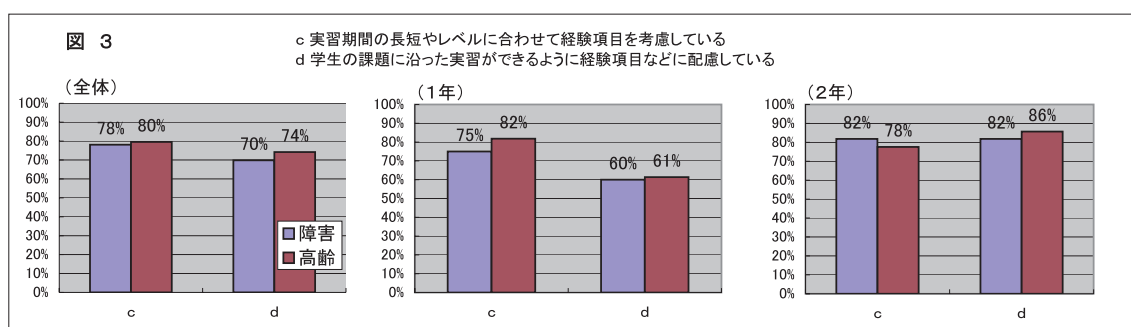


図1 障害分野と図2 高齢分野の両者を比較してみると、①のコミュニケーションから⑪の掃除までのaとbの比較の点では、その値の多い、少ないという全体的傾向は全ての項目で似ていた。b「ある程度実習が進行してから経験させている」項目は、指導者の判断が加わっていると考えられるので、そこに注目してみると分野別の違いが見えてくる。bの回答が高かった項目で双方を比較して見ると、障害分野において50%以上のものは、⑦入浴介助52%と④排泄介助の51%の2項目で、高齢分野では、⑦入浴介助71% ⑤

移乗介助 62% ④排泄介助 54% ⑥着脱介助 52%の4項目であった。次に、b マイナス a の差が大きいものは、障害分野で④排泄介助 28% ⑦入浴介助 27% ⑤移乗介助 14%であったが、他方の高齢分野は、⑦入浴介助 58% ⑤移乗介助 45% ⑥着脱介助 17% ④排泄介助 14%となり、差の値においても高齢分野が大きくなっている。

以上の結果から、a「実習初期から入らせている技術」と、b「その後に入れている技術」の項目数や差が大きいということは、それだけ学生のレベルや技術の難度等に配慮した考えがあることが伺える。従って僅かの差ではあるが、高齢分野の指導者の方が学生への技術経験の時期を、考慮しながら指導に当たっているのではないかと考えた。

図3は経験項目の入れ方への配慮についての結果である。(資料 表4) 障害分野と高齢分野別1・2年の合計(以後全体)他、1、2年と学年別に分けた3種類の図とした。母数は前述の通りである。

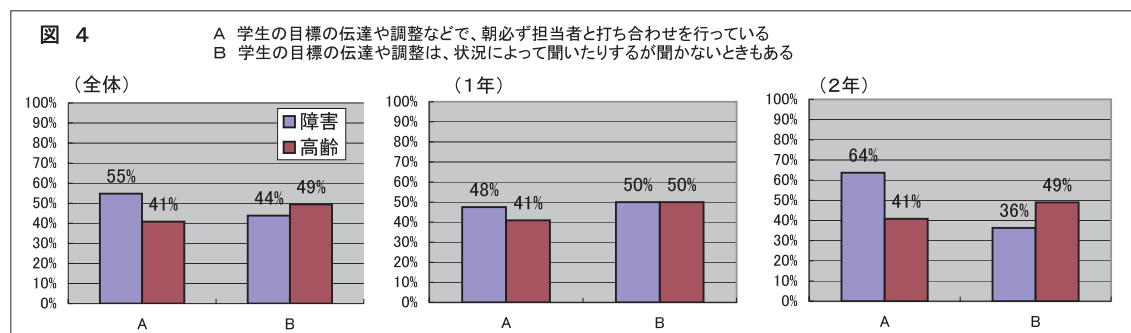


全体での結果を見ると、c・d項目ともに両分野70%以上と配慮されていて大きな差は見られなかったが、僅かにc・d項目いずれも高齢分野の方が多かった。学年別に見ると、d「課題に沿った経験に配慮」の項目で、1年次生より2年次生が22～25%の差で多かったのが特徴として現われている。ここからは両分野の指導者が1年次生よりも2年次生に対して、技術面においても自己の課題の遂行(介護計画やレクリエーション企画等を含む)の面においても、学生のレベルや実習目標を意識した指導者の配慮が伺える。学生の主体的な実習取り組みへの柔軟な配慮は、学生の実習成果にも多いに関係してくると思われるので、有難い配慮である。

図4から10までは実習の進め方について、各項目による2者択一方式での回答結果である。(資料 表5参照)

図4は、毎日の実習に当たって、いつどのような形で指導者と行動計画の伝達・調整を行っているかについてである。全体では、A「朝必ず行なっている」項目で障害分野が55%で高齢分野より14%多くなっている。分野別では、障害分野はA項目が、B「必ず

しも行っていない」項目より9%多く、高齢分野は、AよりもBの方が9%多い反対の結果になった。A項目の2年次生では、障害分野が23%もの差をつけ多かった。

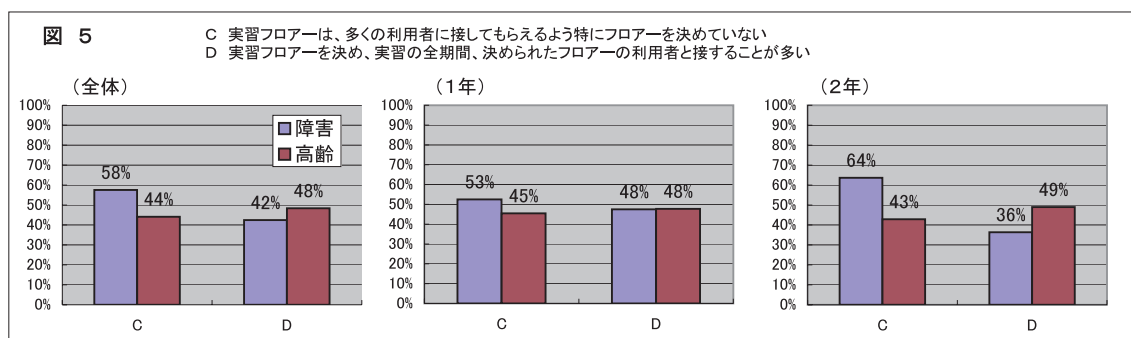


指導をして頂く上で、打ち合わせの時間の長短や、やり方等に違いはあっても、朝のうちに行うことが欠かせないことだと考えていたが、結果を見て認識の違いが大きいことに驚いた。特に高齢分野では、B「状況によって聞いたり聞かなかったり」という進め方が約半数であること、2年次生についても特に配慮が無いことが分かり愕然とした。それは、図3のd項目で「課題に沿った実習への配慮」が多かったのも、実際には一番に朝の打ち合わせが行われるかなと思ったのも拘わらず、必ず行うということが低かったからである。

これについては指導体制そのものとも関係してくるだろうが、指導者の勤務時間と学生の実習時間とのずれや、多忙さ、必要性の認識の違いなど理由は様々と考えられる。前項で経験項目を配慮する姿勢が見られたが、現実的にはその調整も含めて、その日その日で行うのではないかと思うが、この項目での結果と合わせて見るとどのように理解したら良いのか迷いも出てくる。

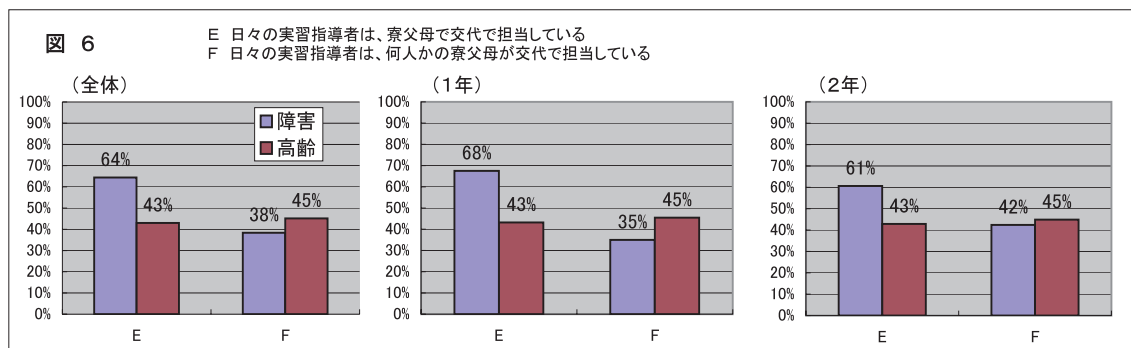
Bの答えには、指導者側の姿勢の他に、学生の方から状況を見て声を掛けることで打ち合わせが行われることも意味していると思うが、やはり、その日の実習の入り方の基本として、打ち合わせを行うという型ができることが望ましいと考える。指導者の考え方を含め、現場の状況に配慮した工夫点を見出すことが必要になるだろう。

図5は、実習フローを決めているかどうかについての結果である。全体で見ると、C「決めていない」項目で、障害分野が58%と高齢分野よりも14%多くなっている。また、障害分野では決めていないC項目が、D「決めていない」項目よりも16%多く、他方の高齢分野では、Dの「決めていない」方が僅か4%ではあるが多い。1年と2年の比較では、障害分野で2年のC「決めていない」方が11%も多くなり、課題等を進める上での困難さが推測できる結果になった。高齢分野は1・2年共殆ど同じであった。



前号にも述べてあるが、限られた実習期間の中での実習であることを考慮すると、学生がより早く場に慣れ、指導者との関係を築き、利用者の特徴を把握して介護実践をする上では、ある程度守備範囲が限定されている方がやりやすく、くるくると場を変えることにはその意味をあまり見出せない。また、2年生は、対象者を決めて介護計画を実践する学習が盛りこまれている。それ故に継続的な関わりを持つ時間は必要であるが、フローア-が決められていないと自ずから制約が出てくるのは明かである。以上のことから、指導者には学習のねらいの理解を図り、方法について話し合い、学習を進めやすい環境条件作りに協力頂くことが何より必要になってくると考える。

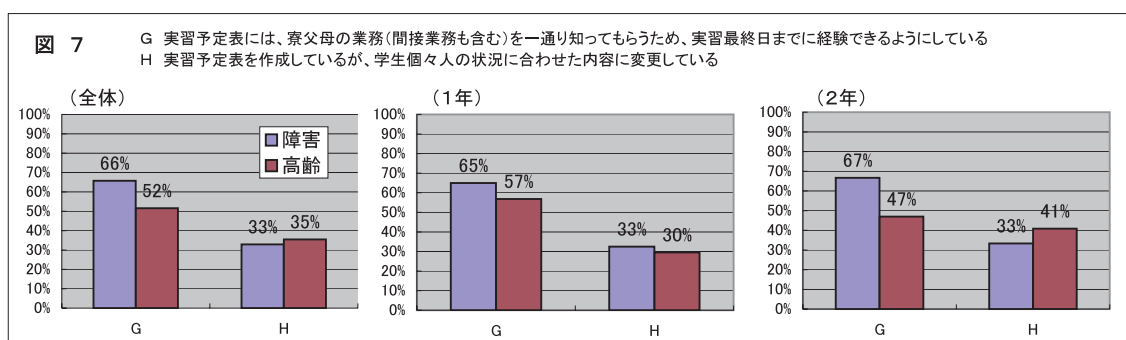
図6は実習指導者の体制（指導者の人数など）についての結果である。全体で見ると、E「交替で担当している」項目で障害分野が64%と高齢分野より21%多くなっている。障害分野では、E項目が、F「一定の指導者が担当している」項目よりも26%も多く、他方の高齢分野では、EとFが43、45%とほぼ同じ値になっている。図5で、障害分野で「フローア-を決めていない」方が多かったが、その指導体制に一致した形で、交替制による多くの指導者が担当している結果が出たものと思う。



学生は学校で技術の基本は学ぶが、学習の範囲が狭いため、現場での指導者のちょっとした技術のやり方の違いや応用的方法に対して、全く違うやり方として捉えてしまうことが少なくない。それだけに、経験の浅い学生にとっては、多くの指導者による様々な指導

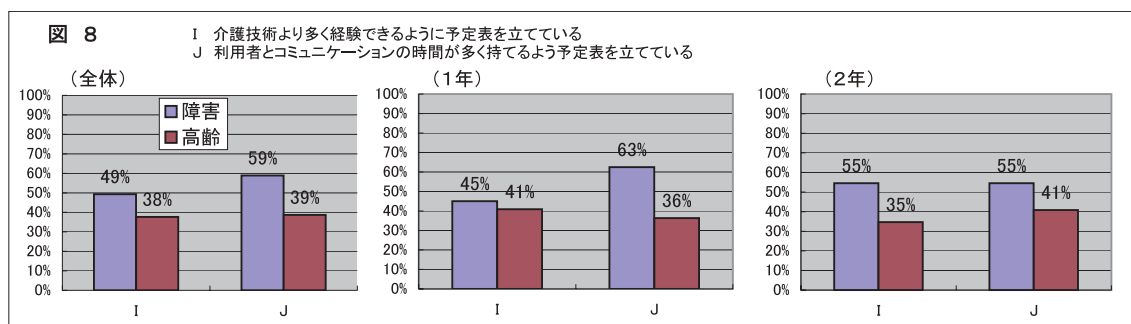
は混乱を招くことになり兼ねない。学生にとっては、経験したことに加えて思考の整理を行い、体と頭でしっかり理解する形で習得するには、数的な経験よりもある範囲の決まった対象者に繰り返し援助を経験するやり方が効果的ではないかと考える。従ってそのためにも、ある範囲の指導者に教わる方法が重要な条件になり得ると考える。実際の現場の状況や都合などを出してもらい、可能な範囲で、経験豊富で指導力のある指導者に担当してもらえる道を模索することは、安定した環境の中での学習条件としての対策を考える意義は大きいと思う。

図7は、指導者が実習予定表作成に当たって業務経験に重きを置いているか、学生の状況に合わせているかについての結果である。全体で見ると両分野共に、G「業務経験を最終日までに経験できるようにしている」項目が、H「個々の学生の状況に合わせて変更」の項目より多い。分野の比較では障害の方が66%で高齢より14%多くなっている。G項目とH項目の差は障害分野で33%、高齢分野で17%であった。学年別でも類似の傾向が見られている。



これにより、高齢・障害分野共に業務経験の方が50%以上の結果で、業務の経験に重きが置かれた学習に力点が置かれていることが明らかになったが、障害分野に特に強いことも判明した。やはり、前号でこの点についても述べているが、学生の限られた実習の中で学ぶべきことは何か、業務なのか、学生の学習ニーズか、指導者に理解して頂くことが必要である。業務の経験は、介護者としての役割を知る上では必要なことであるが、問題は、経験のさせ方にあるのではないかと思う。例えば単純作業的な業務を、繰り返しさせている場合等、そこにどのような学習の意味があるか見出せない学生が多いと思う。学生は就職した新人研修者とは当然違いはあるわけで、同じように扱われているような錯覚を起こさせてはならない。そのためには、明確な学習プログラムを打ち出して、充分話し合いの中で、理解して貰う事が必要になる。

図8は、実習予定表作成に当たって、介護技術とコミュニケーションの比重をどちらに置いているかについての結果である。全体では、I「技術を多く経験できるようにして

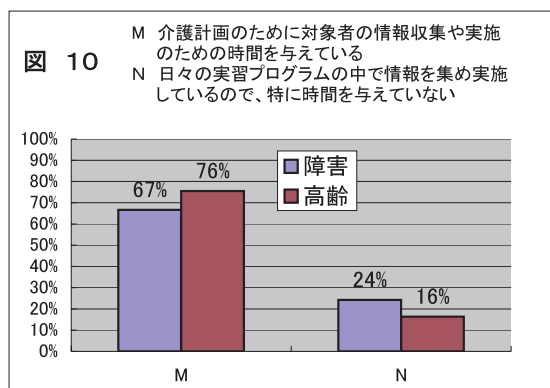
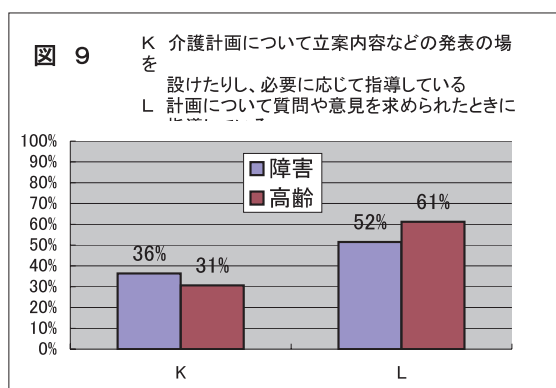


いる」とJ「コミュニケーションの時間を多く持てるようにしている」の2項目は、似通った値になっているのではないかと思う。はっきりいえない理由は、障害分野の回答がIとJの両方を答えたと考えられる100%を超える値になっているからである。しかし、障害分野で2項目とも高齢分野よりも多くなっていることと、Jの「コミュニケーションの時間の配慮」が59%と多くなっていることはデータ上言える。これは障害分野が高齢分野よりも予定表作成に当たって、技術とコミュニケーション経験を意識して行っているのではないかと推察できるが、図7の業務経験に重きが置かれている障害分野の結果と関連させて考えると、矛盾する面もあり解釈が難しい。設問に曖昧さがあったために指導者の考えが充分把握できなかったと思う。

図9と10は2年次生の介護過程の指導方法についての結果である。

図9は指導の機会について聞いているが、K「発表の場を設けたりし、必要に応じて指導」よりも、Lの「求められた時に指導する」項目が両分野とも多くなっている。値の点でも特に高齢分野では、KよりL項目が約2倍になっていて開きが大きいのが特徴である。

介護実習の場では、教員側の求めに応じて計画発表のカンファレンスは、かなりの施設で持って貰っていると認識していた。設問の意図は、発表の場を設定しているかどうかの状況を確認して掴みたかったが、結果は予測を外れていた。これについては、1点は設問が曖昧であった、2点目は、回答者は必ずしもカンファレンスに出席される指導者のみで



なかったということから、Lの「随時質問があった時に指導」という項目に答えが多かったのではないかと思う。施設では実習受け入れ担当者、実習担当者などと役割分担を決めていることが多く、立場上から指導方法を選んだことは当然にありうるだろう。

この結果から他には、学生の主体性や積極性等、その力量がより求められている事が、Lの回答結果に現われていると理解できる。これは学習者としての基本姿勢に対する期待であろうが、初めての介護過程の展開を不安ながら進める学生に対する学内での準備は元より、実習場における指導環境条件の整備が積極性の後押しには必要になろう。具体的には後述する。

指導者の同席を得た発表の場は、学生が介護過程のプロセスや自分の計画内容などを整理し発表することで、受け持った対象者を理解できているか、計画の適切性など教員では指導できない、細かいことにもアドバイスを頂くことが可能である。近年は介護保険の関係で、施設に置いてもケアプラン会議が持たれているので、実習生においても、時間を予め確保して頂き、指導者ならではの指導によって気づきや学びの場として欠かせないので、慣例として定着できるよう協力を求めたい。

次に図10であるが、介護計画を進めるための時間的な配慮についての結果である。両分野共、M「時間を与えている」が67～76%と圧倒的に多かった。高齢分野は76%で障害分野より9%多くなっている。考慮して頂いていることは大変有り難いことであるが、今回は、どれ位の時間が融通されているかの調査が欠けていたのが残念である。

以上実習の進め方について図I～10について述べたが、それぞれに関連したり、内容的に重複していた。従ってそこからの対応策等では当然共通した内容や方法に辿りつくものになっている。また、その中で特に気になったことについて次の2に移して思考した。

2 介護過程学習と指導体制

介護過程の学習は介護福祉士教育過程（指導要領）介護実習科目の中にその内容の一部として指定されている。そのため、各養成校では実習施設側に理解を図り、学習効果が上がる方法を駆使して行っている。当短大の場合も介護実習Ⅱ段階と、Ⅲ段階で学習をさせているが、今回の2段階終了後のアンケートで、実習の進め方について指導者の考え方が明らかになった。特に介護過程の学習をさせている2年次生の結果を踏まえて指導体制と介護過程の学習方法等について若干検討して見たい。

前述した内容に一部重なるが2年次生の結果では、朝の打ち合わせ時間をとることを意識している指導者が41～61%（図4）、決められたフロアで実習をさせている指導者が36～49%（図5）、実習指導者が皆で交替して担当しているが43～61%（図6）、業務経験に重きを置いている指導者が47～67%（図7）という状況が明らかになった。

介護過程を進めるということは、対象者の決定から情報収集、計画の立案そして実施ま

での一連の流れを体験する事を僅か15日間で求めているのである。改めて、2年次生にとってはかなり厳しい環境の中での実習である事が認識できる。仮に指導者に指定された場が、自分の決めた対象者と別のフロアで、朝の打ち合わせも無く、担当者が新しく、業務経験がプログラム化されている等々のことが、何日か同じパターンの連続といった最悪な条件が重なった場合、学生はどのような反応を示すだろうか。書くまでもないことだが、自分の実習目標や内容を計画性よりも、求められている条件に合わせることにエネルギーを消耗し、さらに日々、介護過程を進めなければならない焦りとの板ばさみの中で、苦痛な実習を味わう以外の何物でもない状態になるだろう。余程の精神力と体力を持っていないと、実習の継続性さえも危ぶまれてくることも充分あり得ることだ。

「介護計画の発表の場と必要に応じた指導」の結果が31～36%と少なかった。(図9)場の設定がなくとも学生からの質問があれば指導すると52～61%で答えられているので、決して指導に否定的な姿勢ではない。しかし、場の設定が無いことから考えられるマイナス点では、利用者の理解、計画の妥当さ、調整の必要性など指導者の考え方や実施上の注意等、細かなアドバイスなどを系統的に受ける機会が少なくなってしまうことになると考えられる。

指導の場は、指導者の姿勢や指導力、学生の積極性などによって、臨機応変に作られるものという考えは肯定する。現場では業務で動いている指導者にとって、時間の工面が難しいことが往々にしてあるが、このような中でも求められるのが、学生の積極性である。学生は、自分でできないだけに迷惑を掛けたくないという思いが強い。実習上では指導者の顔色や態度などに非常に敏感になっている学生が少なくない。このような条件の中で、質問するとか自分の課題について申し出るには、大きな勇気が必要になろう。積極性は学生に求められ態度面での条件であるが、一方、積極性を引き出す環境作りは指導者側に求められるものであると言ったら学生を甘やかしていると言われるだろうか。短期間の実習であるからこそ、不必要なストレスを解消できる環境設定が重要であることを強調したい。具体的には、フロアを固定して実習させ、ある範囲の指導者層が指導を担当する。また、朝の打ち合わせによって、業務経験と学生の課題の遂行についての調整を図るなどであろうか。以上の工夫によっても、介護過程の取り組みが数段と前へ進められることは確実だと思う。

実習のやりにくさは、学生の学習成果や満足度に反映する。尾台⁽³⁾らは、実習のやりやすさの理由として、「指導者が決まっている、質問に丁寧に答えてもらえる、行動計画を優先してもらえる、プランについてアドバイスが貰える」との調査結果を出し、学生の自主性や主体性が受け入れられることが、実習のやりやすさに繋がると述べている。また、小林⁽⁴⁾は、「実習が業務優先でなく、受持ち利用者との関わりを優先に行うことができた(時間を持つことができた) 学生が満足度に繋がる要素であると述べている。ここで、「業務優

先とは、学生が施設職員の動きと同様に行うことであり、そのため、受持ち利用者に関わる時間が1時間以下と少なく、実習時間内での介護計画の実施ができなかった状況を指している」と注釈で書いている。

カンファレンスについては、熊崎⁽⁵⁾は、「受持ち利用者の介護過程の展開に対して、具体的な場面や内容を検討するものが多く、学習効果を高める意味で価値があり重要である」と学校でのカンファレンスの意義について述べている。筆者のこの場でのカンファレンスは施設現場でのものを指しているが、意図は、同様に、さらに、教員は、巡回指導や学校での指導に限界があるので、むしろ指導者の立場から、利用者にあった介護過程であるかどうかなど、非常に指導者が大きな鍵を握っている部分があるので、場を設定する意義について強調したいのである。

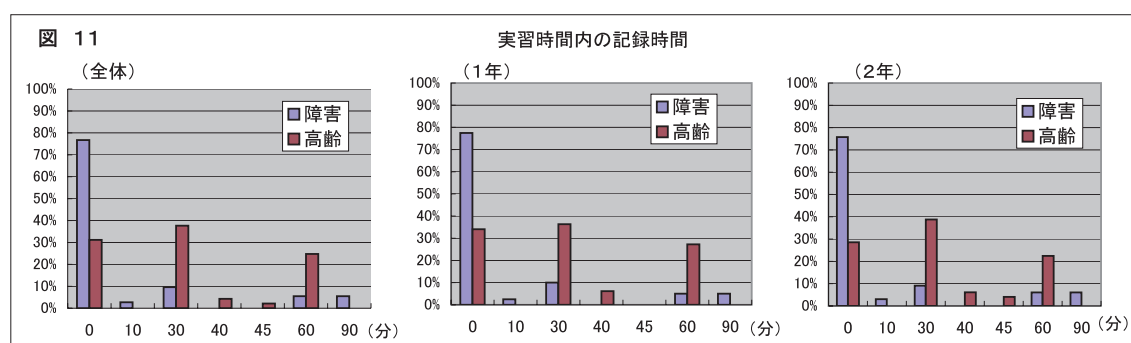
以上の意見を参考にすると、当短大の実習体制について、実習効果をさらに上げるための方策の必要性を強く感じる。そのための具体案として、現在、介護過程を行動計画に取り入れるという面では、学生の理解と積極性に任せている部分について、尾台らが、進めているような、「半日を学生が自主的に計画を立てて動けるようにしている」方式を取り入れることを考える必要性を痛感した。

3 実習記録について

図11は毎日の記録時間をどれ位与えているかについての結果である。(資料 表6) アンケートは与えている時間を分単位に記入してもらったが、無記入が非常に多かった。そこで今回、無記入を0分と判断してデータ処理した。

全体で見ると、0分が障害分野は77%を占め、高齢分野は31%であった。30分では高齢分野が38%と最も多く、障害分野は10%で次点であった。高齢分野は60分に25%という結果もあった。学年別の結果は同じような傾向を示している。

この結果から、記録時間の考え方および実習そのものについてなど、障害と高齢分野に大きな違いがあることが分かった。実習とは体を動かして学ぶものであり、利用者に関わることなど介護の実践を学ぶことに異議を唱えるものはいないであろう。しかし、その



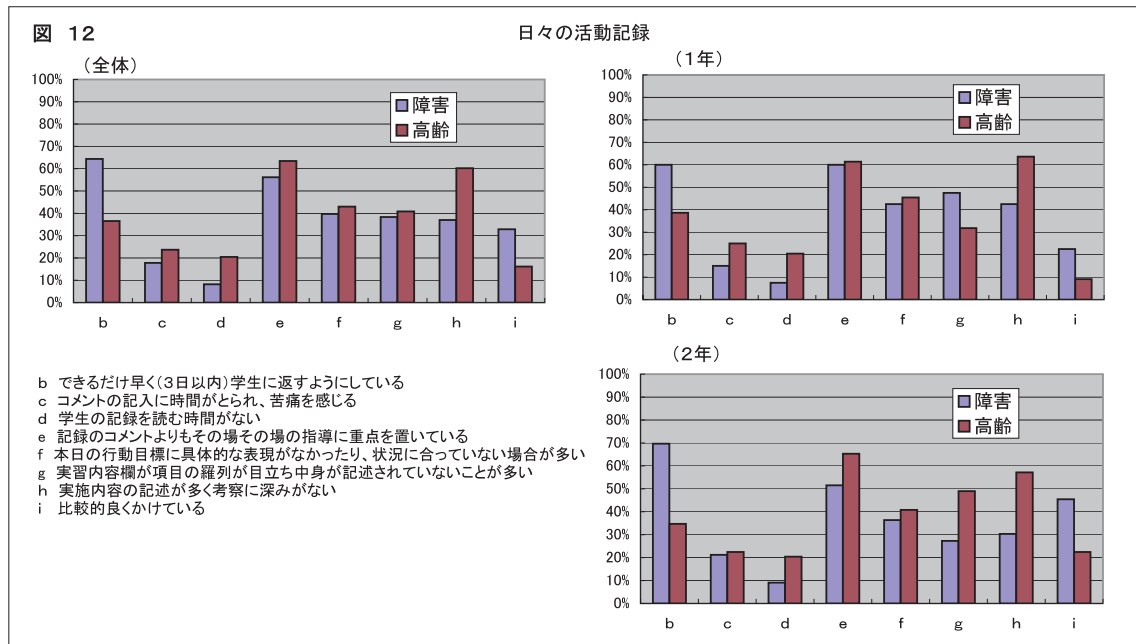
中に、学習者としての学びの状況やステップを考慮に入れた記録の時間への配慮が無視されていないだろうかと多いに疑問が残った。

記録時間内で記録が終わっている学生は少ない。また、反省や振り返りは記録時間意外でも勿論行うことは可能である。だからといって、この時間の不必要性を唱える事には賛成できない。この記録時間の中で例えば短時間であっても、1日の学習内容の整理や振り返りを行うことで、いわば学生にとっては、次の実習すべきことなど意識的行動に繋げることが可能になってくるのである。また、基本的な学習方法でありながら、介護福祉士にとって大事な自己を見つめ洞察するといったことを習慣化することに発展することも期待できるものである。

実際には必要性を理解して下さる指導者は多いと思うが、具体的な話になった時に、業務の実習との調整や、施設での理解が得られるかなど課題は少なくないと思う。根気強く話し合うことで理解が得られると考える。

図12は実習記録「日々の活動記録」についての結果である。(資料 表7) この中でb～eは指導者側が記録にどのように対応しているかについての設問である。障害分野でb「3日以内に返すようにしている」が64%と多く、次いでe「記録のコメントよりその場の指導に重点を置いている」が56%と半数以上の指導者が答えている。高齢分野は、eが38%、b31%であり、いずれも3割強程度の回答だった。障害分野は、前述したように記録時間は与えていないが記録上の指導および、その場での指導など熱心に対応して頂いている結果となっている。

f～iまでは学生の記録内容についての結果である。f～hは、内容の記述が良くない

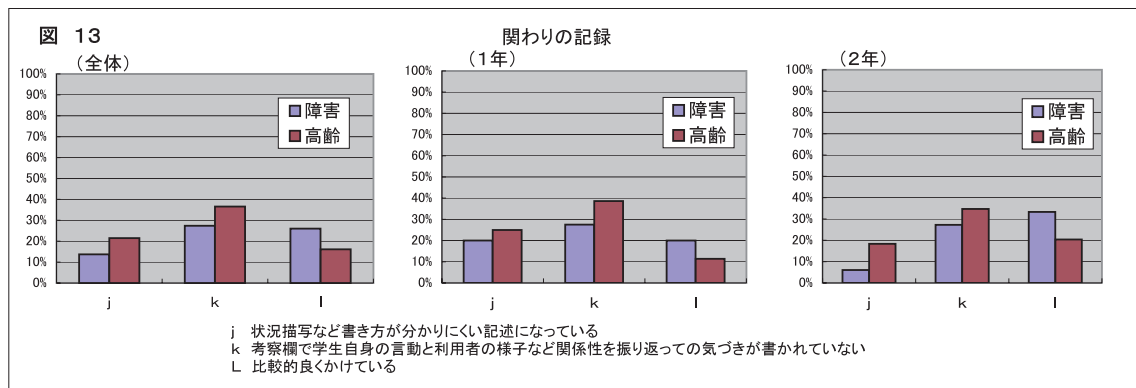


という回答項目であるが、全体でみると障害分野では、37～40%で、高齢分野の方が41～60%と値が多かった。また、学年別では、特に2年の高齢分野の方が、これらの項目が多くあまり良くなかったという結果になっている。

i項目は「比較的良く書けている」という肯定内容の回答であるが、全体では、前の項目の結果をそのまま反映した形で障害分野33%、高齢分野16%と値が少ない。ただ、学年別で見ると高齢分野の2年は、1年よりも倍以上の値になっているのでやや救われる。

以上から、高齢分野における指導者が記録内容、中でも特に考察欄等への求めるものの高さがあることと、2年生に対してより内容の期待を持っていることが、厳しい結果となって現われたのではないかと推察できる。

図13は、「関わりの記録」の結果（資料表8）であるが、jとkは良く書けていない内容についての項目で、結果は全体と各学年共に似たものになっている。特に考察欄について28～39%が良くないという答えであった。Iは「比較的良く書けている」という項目であるが、全体でも障害分野26%、高齢分野16%という結果で「日々の記録」と似た結果で良い評価が少なかった。ここでも高齢分野の値が多くなっている。



特に考察欄が悪かった。考察は一番の大切な箇所であり、利用者の理解やコミュニケーションまた、次への成長に関与するものであるのも、もっとしっかり書いて欲しいと望まれる気持ちは分かる。指導者はその対象者については多くの情報と関わった経験があるので、何をポイントに考察すべきか視点が定まるが、学生の場合は、特にその利用者について接していた時間も限られていたり、その場の状況しか分からない等で、やりとりなどの表面的なことになって、全体像との関連での的を得た考察ができない事ははやむを得ないことが多いと思う。そこに指導者との間に大きな差があるように思う。

関わりの記録の中での考察は、学生自身の感受性や言動などに焦点を当てて振り返ることもねらいになるが、そこについては筆者の経験上、指導者側はあまり細かく見ない場合が多いのではないかと考えている。そう考えて見ると、ある意味で考察欄について、視点の

相違が多分あって、それが今回の回答の結果に出ていると思われる。

自由記述欄にもたくさん意見を裏付けるものがあったが今回は省いている。前号を参照して欲しい。

〈まとめ〉

- ① 高齢分野の方が、技術経験については学生の進度やレベル、技術の難易度に合わせて配慮している。
- ② 高齢分野の方が、朝担当者との打ち合わせが少なかった。特に2年次生において障害分野との差が23%にも及んでいる
- ③ 障害分野の方が、実習フローを決めない割合が多く、特に2年次生では高齢分野とのその差が21%と大きい。
- ④ 障害分野の方が、指導担当を寮父母全員で担当している割合が多く、1年次生においては高齢分野と25%差がある。
- ⑤ 障害分野の方が、業務経験を一通り経験出来るように重きを置いている。2年次生では高齢分野との差が20%になっている
- ⑥ 介護過程の学習については、僅かの差であるが、高齢分野の方が学生への質問に答えたり、実施のための時間を与えている
- ⑦ 記録時間に関しては、障害分野が78%与えられていない。高齢分野との差が大きい
- ⑧ 記録については、
 - ・障害分野の方が「日々の活動記録」の返却においては、熱心で早く学生に戻している
 - ・「日々の活動記録」「かかわりの記録」共に、高齢者分野の方が、考察欄が不十分だと言う意見が多い
- ⑨ 学生の実習成果を上げるためには、指導体制など、学習環境を整える必要がある
特にあげられる事は以下のことである
 - ・朝の打ち合わせの実施 ・実習フローの固定化
 - ・指導者層の限定化 ・業務優先でない実習プログラム
- ⑩ 2年次生の介護過程の取り組みに対しては、行動計画の中で、半日単位の時間を与えることの検討が必要である
- ⑪ 記録時間の確保は、実習効果を上げるために必要要件である。
- ⑫ 教育目標や進め方について、木目細かな説明と学習効果を上げるための意見交換などを指導者側とより丁寧に行う必要がある

IV 終わりに

他校によるこの種の調査結果が見出せなかったのが残念ながら比較はできないことと、同時期学年による介護過程の内容調査や到達度についての分析を行っていないので、推察の域を出ないことも多くなってしまった。

しかし、前号の報告と合わせても不都合な点はある程度判明した。今までの実習指導者の理解ある態度から、学校側の方針次第で学生の実習環境は変わって行くことが期待できるので地道な改善策を積み重ねて行きたい。

参考文献

- (1) ①畠山千春ら ②介護実習指導のあり方を探る—実習施設指導者からのアンケート結果を踏まえて— ③共栄学園短期大学研究紀要 ④第20号 2004
- (2) ①尾台安子ら ②総合実習からの学生のまなびと個別援助実習の有意義性 ③介護福祉教育 ④第8巻第1号 2002.6
- (3) ①尾台安子ら ②介護福祉実習に対する学生の意識と課題 ③介護福祉教育 ④第10巻第1号 2004.4
- (4) ①小林千恵子 ②介護課程の理解と実習やケースのまとめに及ぼす要因の検討 ③介護福祉教育 ④第10巻第1号 2004.4
- (5) ①熊崎百代 ②施設介護実習におけるカンファレンスの検討 ③介護福祉教育 ④第10巻第1号 2004.4

<資料>

表2 障害

	a	b	その他
①	95%	7%	0%
②	55%	32%	0%
③	55%	40%	0%
④	23%	51%	5%
⑤	30%	44%	3%
⑥	44%	48%	0%
⑦	25%	52%	4%
⑧	60%	29%	0%
⑨	75%	18%	1%
⑩	68%	18%	3%
⑪	86%	8%	3%

表3 高齢

	a	b	その他
①	96%	3%	0%
②	61%	31%	0%
③	58%	40%	0%
④	40%	54%	1%
⑤	17%	62%	8%
⑥	35%	52%	0%
⑦	13%	71%	0%
⑧	61%	24%	0%
⑨	45%	28%	2%
⑩	61%	17%	1%
⑪	62%	22%	2%

表4

	全 体		1 年		2 年	
	障 害	高 齢	障 害	高 齢	障 害	高 齢
c	78%	80%	75%	82%	82%	78%
d	70%	74%	60%	61%	82%	86%

表5

	全 体		1 年		2 年	
	障 害	高 齢	障 害	高 齢	障 害	高 齢
A	55%	41%	48%	41%	64%	41%
B	44%	49%	50%	50%	36%	49%
C	58%	44%	53%	45%	64%	43%
D	42%	48%	48%	48%	36%	49%
E	64%	43%	68%	43%	61%	43%
F	38%	45%	35%	45%	42%	45%
G	66%	52%	65%	57%	67%	47%
H	33%	35%	33%	30%	33%	41%
I	49%	38%	45%	41%	55%	35%
J	59%	39%	63%	36%	55%	41%
K					36%	31%
L					52%	61%
M					67%	76%
N					24%	16%

表6

	時間 (分)	全 体		1 年		2 年	
		障 害	高 齢	障 害	高 齢	障 害	高 齢
a	0	77%	31%	78%	34%	76%	29%
	10	3%	0%	3%	0%	3%	0%
	30	10%	38%	10%	36%	9%	39%
	40	0%	4%	0%	6%	0%	6%
	45	0%	2%	0%	0%	0%	4%
	60	5%	25%	5%	27%	6%	22%
	90	5%	0%	5%	0%	6%	0%

表7

	全 体		1 年		2 年	
	障 害	高 齢	障 害	高 齢	障 害	高 齢
b	64%	37%	60%	39%	70%	35%
c	18%	24%	15%	25%	21%	22%
d	8%	20%	8%	20%	9%	20%
e	56%	63%	60%	61%	52%	65%
f	40%	43%	43%	45%	36%	41%
g	38%	41%	48%	32%	27%	49%
h	37%	60%	43%	64%	30%	57%
i	33%	16%	23%	9%	45%	22%

表8

	全 体		1 年		2 年	
	障 害	高 齢	障 害	高 齢	障 害	高 齢
j	14%	22%	20%	25%	6%	18%
k	27%	37%	28%	39%	27%	35%
i	26%	16%	20%	11%	33%	20%